

恋する

伊勢物語

むかしとなくありけり



俵万智

筑摩書房

恋する伊勢物語 俵万智

筑摩書房

むかしとこありけり

苏工业学院图书馆
藏书章

● 俵万智 (たわら・まち) ●

1962年、大阪生まれ。85年早稲田大学第一文学部卒業。85～89年、神奈川県立橋本高校教諭。86年第32回角川短歌賞受賞。87年、歌集『サラダ記念日』(河出書房新社)刊行。同書で第32回現代歌人協会賞受賞。著書に、『とれたての短歌です。』(共著、角川書店)、『よつ葉のエッセイ』『風になる』『かぜのてのひら』『チョコレート革命』(河出書房新社)、『りんごの涙』(文藝春秋)、『少年少女古典文学館 第二巻 竹取物語・伊勢物語』(共著、講談社)、『俵万智のハイテク日記』(朝日新聞社)他。

恋する伊勢物語

一九九二年五月五日 初版第一刷発行

二〇〇一年六月十日 初版第九刷発行

● 著者 俵万智 ●

発行者 菊池明郎

発行所 筑摩書房

〒一〇一八七五五 東京都台東区蔵前二一五―三

振替 〇〇一六〇八四二三

● 印刷 厚德社 ●
製本 積信堂

© 1992 M.Tawara Printed in Japan

ISBN 4-480-81309-8 C0095

※注文・お問い合わせは、乱丁・落丁本の交換は左記宛へ。

〒三三一八五〇 さいたま市鶴引町二六四 筑摩書房サービスセンター

TEL 048-671-0044

もくじ

1	とりあえず、男がいた	… 4
2	短歌は必修課目	… 8
3	きぬぎぬの心	… 13
4	身分違いの女	… 18
5	殺し文句は永遠に	… 23
6	風流心は忘れない	… 27
7	母のがんばり	… 39
8	大いなる誤解	… 44
9	去ってゆく妻へ	… 49
10	突然の破局	… 54

11	妻が公認する浮気	...	60
12	三年目の悲劇	...	72
13	告白できずに	...	83
14	どっちもどっち	...	88
15	別れたあとで	...	93
16	いやな男	...	97
17	年老いて、なお	...	102
18	どうにもとまらない	...	113
19	斎宮の青春	...	125
20	桜の花は罪つくり	...	133

21 思いがけない展開
…
141

22 さらに別れ
…
146

23 縁がなければ
…
154

24 だから出世しない
…
158

25 約束の楽しみ
…
165

26 通い婚のせつなさ
…
170

27 言葉の力
…
174

28 結婚モラトリアム
…
180

29 短歌でナンパ
…
188

30 ゆっくり噛んで
…
192

31	藤の花かげ	⋮	196
32	女もつらいよ	⋮	201
33	龍田川をめぐって	⋮	205
34	代筆の妙技	⋮	210
35	せつない話	⋮	215
36	無欲の勝利	⋮	219
37	いつかゆく道	⋮	224

あとがき

恋する伊勢物語

名にしおはばいずこそ問はむ葉月草

八月生よれの人の心と



とりあえず、男がいた

「むかし、男ありけり」

これが、『伊勢物語』に収められている百いくつの章段の、典型的な書き出しだ。

むかし——と言ったって、どれぐらい昔なのか、たとえば時代でいうとどのあたりなのか。男ありけり——そりゃ、昔だって男ぐらいいたでしょうけど、一体どんな男なのか。

飲み物の注文をする時に、

「とりあえず、ビール」

という言葉をよく耳にするけれど、『伊勢物語』の書き出しというのは、あれに似ている。

「（とりあえず）むかし、男ありけり」

しかも、この場合の「けり」という過去の助動詞は、詳しく分類すると「人づてに聞き知った過去」を表すもの。だから話し手は、「男」と会ったりしゃべったりしたことはない。

「（とりあえず）むかし、男ありけり（なんだけれど、いや別に、そいつと親しかったとか、

よく知っているとかっていうんじゃないんだ」

受験生のために付け加えておくと、過去の助動詞にはもう一つ「き」というのがある。こちらは、過去に直接体験したことを回想する場合に、多く用いられる。

「むかし、男ありき」

となると、現代語訳では同じ「昔、男がいた」であるが、話し手は、この男とつきあいがあった、ということになる。そうすると、「むかし」という時代も、「男」という存在も、少しは限定されてくるだろう。

逆に、ありとあらゆる限定から自由なのが、

「むかし、男ありけり」

だ。ここには、どんな物語でも生まれる可能性がある。

『伊勢物語』では、章段が変わるたびに、「むかし……」「むかし……」と改めてやり直している。物語全体が、首尾一貫したつくりであることを拒否しているかのような、しつこさだ。

そして中には、

「むかし、紀の有常といふ人ありけり」

といった具合に、いきなり実在の人物が登場してくる段もある。このあたりは、まるで統一がとれていなくて、読者としてはとまどうところ。

互いにつながりのある段もあるけれど、基本的には、一段一段を独立させて読んだほうが、

かえって全体を楽しめるのではないだろうか、と私は思っている。せつかくの、「むかし、男ありけり」なのだから。

「あれ？『伊勢物語』って、恋多き男、在原業平の一代記じゃなかったっけ」と、疑問を抱かれるかたが、おられるかもしれない。

実際、高校の教壇に立っていた私も、そう教えていた。

「むかし、男ありけり……作者はどんな時代とも、どこのだれそれとも言っていない。このように限定しないことによって物語の『虚構性』を保証しているわけですね」と言った直後に、

「ところで、この男というのは、平安時代の有名な歌人、在原業平です」と限定していたのだから、すごい。

なぜそういうことになるかという点、『伊勢物語』に出てくる短歌のうち、かなりのものが『古今和歌集』などにある業平の短歌と重なるので、男Ⅱ在原業平という図式が考えられるのである。

一つの知識としては、知っていて悪くないことかもしれない。が、物語を楽しむうえでは、さほど重要なこととは思われない、というのが私の本音だ。業平の作ではない歌も出てくるし、登場する「男」はさまざまで、これをたった一人の人間と考えることはできない。

たしかに歌は業平のものである段も、「物語」の部分は、あくまで物語なわけで、彼の忠実

な伝記ではないだろう。

『伊勢物語』の成立にまでさかのぼって考える場合には、業平の存在は重要かもしれない。が、一人の読者としては、せっかく時空から解き放たれた自由な存在である「男」を、再び現実と呼び戻してピンでとめることはないのでは？　と思ってしまう。

それよりも、ここに描かれた、さまざまな恋のバリエーションを、楽しみたい。「恋の見本市」と名づけたいぐらい、『伊勢物語』にはいろんなパターンの恋がある。

そしてどんなに短い段でも、必ず短歌が出てくる。これは、短歌を作っている私にとって非常に興味深いところ。現代では、物語と短歌はそれぞれ別になっているけれど、かつては物語と歌が一体になった「歌物語」というジャンルがあった。その代表選手が『伊勢物語』なのである。今風に言くと、短歌入りの小説、あるいはストーリー付きの短歌集、といった感じだろうか。

実は私は、二年ほど前から、『伊勢物語』の現代語訳にとりくんできた。その作業を通して、あらためて、そのおもしろさを感じることができた次第。

そして「訳」をしていると、いろいろと余計なことを考える。書き写しているうちに、話を付け加えたくなったりする。「男」に一言、言つてやりたくなる時もある。

そういった「余計なこと」や「付け加えたくなつた話」や「男への一言」を取りまぜながら、これから『伊勢物語』の魅力を探っていきたい、と思う。

短歌は必修課目

『伊勢物語』の初段に登場する「男」は、「初冠^{うひかうぶり}」という儀式をすませ、大人の仲間入りをしたばかりの若者である。「初冠」とは、読んで字のごとく、初めて冠をかぶること、それまでの子ども用の髪型を卒業する。貴人の子弟は、このとき最初の位をもらった。

さて、その男が、古都奈良の春日の里というところへ狩りに出かけたところ、思いがけず美しい姉妹が住んでいた。彼は一目惚^ぼれしてしまう。

姉妹というからには、女が二人いるわけだが、そのどちらに恋をした、ということは書かれていない。どちらでもよかったし、どちらともよかったのだ——と思う。

「恋に恋するお年頃」という言い方があるが、彼の場合まさにそれで、恋というもののあこがれ、女性というものの全体への興味が、胸に芽生えはじめていた。姉妹に恋をするという設定は、そのことをよく物語っているのであって、決して不自然なことではないだろう。

「初めての恋」は、まず、形から入る。「形」を体験すること与时めいてしまう。それは、

今も昔も変わらない。

初めてのラブレター、初めてのデート。手紙の内容よりも、自分がラブレターをもらったということ、そのことにドキドキする。デートの相手がだれということより、自分が今、いわゆるデートというものを体験しているということ自体に、有頂天になる。

初冠をしたての男は、ちゃんと当時の恋のステップどおり、姉妹に短歌を贈った。いきなり声をかけたりしては、レディに対して大変な失礼になる。まず、短歌を贈るのが、ジェントルマンなのだ。ここでつまずいてしまったら、恋の成就是望めない。「ステキ!」と思ってもらえればしめたもの、少なくとも及第点は取らなくては。短歌は、恋の必修課題なのである。

歌のデキはもちろんのこと、文字の上手下手も、大きなポイントとなる。それから紙の選び方。上級編になれば、紙に香をたきしめたり、季節の花を添えたりと、センスの見せどころもいろいろとある。

男が姉妹に贈った歌を見てみよう。

春日野の若紫のすり衣しのぶのみだれかぎり知られず

彼はこの歌を、普通の紙ではなく、自分の着ている狩衣かりぎぬの裾すそを切りとって書きつけた。いきなり、上級編である。その狩衣は「しのぶずり」といって、紫草を染料に用い、乱れた模様を

摺りつけたもの。「若紫」には、染料の紫草と、若い女性のたとえとが掛けられている。

春日野の若く美しい女性のために、私の心は限りなく乱れています。そう、ちょうどこのしのぶずりの衣の模様のように……。

あれ？　なんだかどこかで聞いたような歌だなあ、と思われた方も多いだろう。実は『古今集』に、有名な歌がある。作者は源融。みなものとしある

みちのくのしのぶもぢずり誰ゆゑにみだれそめにし我ならなくにたれ

「あなたのために、しのぶずりのように、私の心は乱れています」という発想は、そっくりそのまま、ここから借用したものだった。

「なあんだ。すてきだなと思つたら、ネタは『古今集』にあるのか。ちよつとがっかりね」と思うのは、個性の時代を生きる現代の女性。古歌をふまえて歌を詠むというのは、プラスにこそなれ、マイナスでは決してない。

「まあ、『古今集』をちゃんとご自分のものになさっているのね。教養のあるお方♡」と考えるのが、いにしえの女性なのである。逆に、この歌の出どころもわからないようでは、女性のほうがバカにされてしまう。

初めての恋文にしては、男はなかなかの健闘ぶりだ。狩衣に書くなどというのは、やりすぎ